

# 会 議 録

## 1 会議名

令和元年度第2回上越市食育推進会議

## 2 議事（公開・非公開の別）

（1）令和元年度上越市食育推進実施計画（アクションプラン）進捗管理について  
（公開）

（2）第3次上越市食育推進計画指標項目の取組状況について（公開）

（3）意見交換（公開）

（4）その他（公開）

## 3 開催日時

令和2年2月6日（木）午後1時30分から4時まで

## 4 開催場所

上越文化会館 大会議室

## 5 傍聴人の数

2名

## 6 出席した者（傍聴人を除く。）氏名（敬称略）

・委員：高橋慶一、野口孝則、柳沢幸也、上野則子、藤田芽美子、岩崎洋一、笹原絢子、  
山本敦子、小林小枝子、渋谷勝（坂口委員代理）、平澤栄一、竹内伊澄（樋口  
委員代理）、松井和代、細谷知世（西舘委員代理）、大山仁、近藤直樹、  
柳澤祐人

・事務局：農村振興課：桐木課長、廣田副課長、谷川係長、北山主任  
健康づくり推進課：春日上席保健師長、保育課：渡邊係長、農政課：太田副  
課長、教育総務課：塚田副課長、学校教育課：手塚副課長、社会教育課：福山  
副課長、上越ものづくり振興センター：村山主幹

## 7 発言の内容

### （1）開会

### （2）挨拶

野口会長：私も上越市が5年目になりまして、やっと上越らしい冬の景色が見られまし  
て、ほっとしているところです。感染症の話題もある中で、体づくり、健康づく

りの源は、食であることは皆さんご存じのとおりで、しっかり睡眠をとって、上越のおいしいものを食べて、健康で健やかに楽しく過ごせるように、その計画である食育推進計画について、市役所からの情報をいただきながら、進捗を確認して今後に向けていきたいと思ひます。

本日は、「上越市のこれからの食育推進」について、それぞれの委員の皆様がどんなことができるか、市役所を始め、市民が今後どんな形で食育を推進できるかを含めて情報共有をしていきたいと思ひています。ぜひ、皆様からの率直なご意見をお願いしたいと思ひます。

### (3) 議事

#### ① 令和元年度上越市食育推進実施計画（アクションプラン）進捗管理について（公開）

野口会長： 次第の3議事(1)令和元年度上越市食育推進実施計画（アクションプラン）進捗管理について事務局説明をお願いします。

事務局： 資料No.1、2により説明（説明省略）

野口会長： 今回、進捗管理一覧表の「△」の項目を中心に説明いただきましたが、「◎」はとてもすばらしいことでもありますし、「○」はおおむね良好に進んでいることと思ひます。しかし、今ご説明いただきました「△」の項目について、委員の皆様もお気づきかと思ひますが、昨年と比べれば、数字が良好になっている、ほぼ変わらない項目もあります。

一つ目の質問は、「◎」「○」「△」「×」の区分けの仕方ですが、事業を実施したのかどうかという観点と、実施したことによる成果があるのかないのかという観点についてです。例えば、「○」は計画通りの事業を実施したという言葉になっていて、「△」は計画された事業に取り組んだが成果が不十分だったという形になっています。「◎」は成果も挙がっています。「○」は、成果はどうかという文言が入っていません。区分けの意味を教えてください。

事務局： 記載が不十分だったところがあります。「○」については、事業を実施し目標を達成したという意味で「○」になっておりますので、変更させていただきます。

野口会長： 良好なところはどんどん書き込んでいって、頑張っているところは出していけばいいと思ひます。

もう一つ、ただ今の十数項目の中で、昨年と比べて良好なところと、目標の数値に対して達成しているかいないか、項目によっては目標との比較をしていたり、昨年との比較をしていたりしますが、対象をどこにおいて評価するか、市の中で決めているのでしょうか。担当課によって評価しているのでしょうか。

事務局： アクションプランは毎年見直し、それぞれ年度ごとに目標を設定しております。基本的には年度ごとの評価ですが、記載の中で、数値だけでなく、内容の充実が、以前の会議でのご提案でもありましたので、それを踏まえて記載したのが「前年と比較して」の部分になります。市としては、目標に対して評価をしております。

野口会長： それを踏まえて考えますと、最後にご説明いただいた「食品ロス削減に向けた取組」については、昨年と比較してもポイントが上がり、目標の数値も超えている、しっかりと実施できたところについての市民の意識、行動が、データとして表れていると感じます。

## ② 第3次上越市食育推進計画指標項目の取組状況の確認について（公開）

野口会長： 議事の(2)第3次上越市食育推進計画指標項目の取組状況の確認について、事務局説明をお願いします。

事務局： 資料No.3、4、5により説明（説明省略）

野口会長： 以前の会議でも、昨年との比較で上がった下がったではなく、トレンドを追うというキーワードも出ていたかと思います。資料No.4で、上越市のここ数年の動き、トレンドがグラフで「見える化」されたと思います。

それでは、ご質問やご意見がありましたらお願いいたします。

岩崎委員： 市民アンケート調査結果ですが、このデータは市民の本当の声が挙がっていると思いますので、非常に貴重なデータだと思いますが、この結果に対する考察がほしいと思います。考察があると、次の施策への成果や反省が生まれますので、男女別や年代別など、グループ分けをして分析すると、より細かな施策につながるとと思います。母数を年代別に合わせるなど、工夫してもらえるとありがたいです。

事務局： 今後も市民アンケートの実施がありますので、いただいたご意見を参考に、まとめ等をさせていただきたいと思います。

### ③ 意見交換（公開）

野口会長： それでは意見交換に移ります。はじめに事務局から説明をお願いします。

事務局： 第3次食育推進計画では、「実践の環を広げよう」をキーワードに各分野において取組を進めておりますが、先ほどご確認いただいたとおり、成果が表れている分野もあれば、目標値に達していない分野もあります。

食育市民アンケート結果から見ると、若い世代の食育の実践度は、全世代に比べ低い数値で推移しています。以前もこの会議で、若い世代についての意見交換を行いました。忙しい世代であり、アプローチが難しい状況であることは皆様ご承知のとおりかと思えます。

しかしながら、この世代は親世代も多く、子どもへの影響や健康寿命の延伸を考えた時、核となる世代であることは間違いありません。

自分自身の食事内容だけでなく、伝統料理や作法などの継承も若い世代を見ると、受け継いでいる数値は下がっている状況にあります。

このような状況から、事務局としましては、今年度新たに高校生に向けた食育推進事業を立ち上げましたが、今後も若い世代が核となると考えております。

若い世代へのアプローチは事務局が考える一例ですが、委員の皆様からは、平成30年度から食育推進会議におきまして、主にアクションプランの進捗管理を通じて、現在の上越市の食育推進の状況をご確認いただいているほか、所属する組織において食育を推進いただいているところです。

本日は、皆様のこれまでのご経験や、第3次計画の計画期間が終盤を迎え、第4次計画策定を見据えた中で、「上越市のこれからの食育推進」について、意見交換をお願いしたいと思います。

それでは、野口会長よろしくお願いたします。

野口会長： 今ほど説明があったとおり、事務局の思いもありまして、本日の意見交換に時間をとってあります。

この会議の場において、意見交換がなされた内容を基に、上越市では新たな食育推進事業として、今年度から若い世代に向けた取組が始まりました。本日の皆様のご意見からも今後の市の取組の方向性のヒントとなるものを多数いただければと思います。

若い世代のみならず、どういう方に事業を展開できるかという意見でも結構ですし、全て市に任せることが食育推進ではないので、皆さんの各組織、個人としてのお考えや、今後実施されるような取組に対して意見交換ができればと思います。どんなところに重点を置きたいかなどお伺いできればと思います。

例えば、アクションプランの進捗管理の中でもありましたように、伝統的な料理の伝承や、子育て世代に対するアプローチ、地域の農業振興など、食育は幅広いところがありますので、忌憚のない意見を伺えれば嬉しく思います。

竹内委員： いろいろなところでの講座などは、若い世代の参加が少なく感じています。昨日、歯科衛生士として板倉区の乳幼児健診に行きました。いつもは健診ですが、保護者向けの歯周病予防講座を設け、その中で唾液潜血検査を行い、唾液の中に出血があると、歯周病のリスクがあるという話をさせていただきました。

若い世代は自分のことは二の次で、子どものことや親のことばかりを考えています。自分の体のことについて聞いたことはよかったとの意見がありました。

若い世代へのアプローチが難しいという話がありましたが、対象を選ぶ時にわざわざ来てもらうのではなく、何かの時に情報提供できるようにすれば、情報が伝わりやすくなると思います。保育園でも虫歯予防教室をやっています。その中で生活習慣病や噛むことの大切さを取り入れています。どうしても子ども対象のお話になってしまいます。子ども連れで話が聞けるというプラスの面がありましたので、何かの機会と組み合わせさせて実施するといいかないと思いました。

大山委員： 健康福祉部は、アクションプランの中では、生活習慣病の改善で、市栄養士による栄養指導等を行っております。

ただ、市で分かるのは国民健康保険加入者となりますので、その方へのアプローチは積極的に行っており、改善の中で介護保険の低減につながっていますが、若い方へのアプローチは課題と考えております。

後ほど担当から説明があると思いますが、健康づくりポイントなどの取組を織り交ぜながら、市民が参加できるようなことも行っております。事例を見ますと、食育に関連する解説がないところも改善点かと思えます。皆様のご意見をいただきながら、食につながる取組も情報発信していく必要があるのかなと思っております。

なかなかジレンマで、アクションプランの中で、「共食」の項目がありました  
が、一緒に食べることはいいことですが、仲がいい人が集まるとお酒を酌み交わ  
し、甘いものやしょっぱいものをたくさん食べてしまうことがあり、食べ物の摂  
取の指導もしていますので、背中合わせのところがあります。若い人へのアプロ  
ーチも健康づくりポイントのほかに考えていきたいと思っておりますので、ご意  
見をいただければ保健指導に活かしていきたいと思っております。

野口会長： 先ほどのアクションプランの21ページ「保健指導事業 食生活改善事業」は  
「△」ですが、平成30年度に比べて、市民アンケートで全世代、若い世代ともに  
3ポイントの伸びがあることを考えますと、地道な取り組みの成果は表れてきて  
いるでしょうし、今後も少しずつではありますが、数字のポイントが上がってく  
るというトレンドは我々も見守ってきたいと思っております。

柳澤委員： 教育委員会の柳澤です。アクションプランや推進計画指標項目については、そ  
れぞれの指標項目で、目標の値が記載されていて、例えば、「朝食を欠食する市  
民」の割合で、小中学生の目標は0パーセントでいいと思いますが、一方で、そ  
の他の項目で、令和3年度の目標値が、「ゆっくりよく噛んで食べる市民」の割  
合で70パーセント、「普段の生活の中で食事を楽しんでいる市民」の割合で90  
パーセント、気持ちとしては全て100パーセントに向かって目標を設定して、途  
中経過としてこれくらいだというのが根底にあれば、成果に対する「○」「△」  
というのはよっぽどの後退がなければ、全て「○」でいいと思います。

取り組んでいるので、その数値が一人足りなかったとか、1パーセント下回っ  
たとかで、自動的に「○」にはならないというのがルールだとすれば、定性的な  
目標と定量的な目標と区分けをしながら、協議会を作って取り組んでいる仕事  
については、全部「○」でいいのではないかと思います。

若い世代へのアプローチは本当に難しいと思います。なぜなら、自分は何もし  
なくても健康だから、どこも痛くないし、具合も悪くないし、体に不調をきたす  
のは、何十年も後の話だという感覚を持っている年代だと思います。また、社会  
の中で様々な役割を与えられて多忙な方々だと思います。

しかし、先ほど竹内さんが言われたように、話をして自覚をしてもらえれば、  
そうかなと思うことは多分にあるかと思います。地道なことになります。情報

を発信しながら、少しでも目に止めてもらいながら、興味を持った人には触れてもらうような、劇的な数字の改善はないかもしれませんが、地道にやっていくしかないのかなと思います。

近藤委員： 農林水産部の近藤です。食育の一つひとつの項目を見ていけば、おのずと個人がどのように実践するかに尽きると思います。つまり、個々の人たちがどのように意識を持って取り組んでいただけるか、そのために我々が情報提供なり、意識を変えていくことに響くような取組ができるかどうかになるかだと思います。

食育実践セミナーをやっておりますが、それは会場を用意して、こちらから情報提供する形になります。その際、来ていただいた方には情報提供できますが、来ていただいた人はそもそも意識が高い方ですし、意識のない方は来ないということで、どんどん格差ができていきます。

若い方へのアプローチですが、意識の低さ、自分とは縁遠いことという認識を持っていけば、尚更こういった取組は希薄になっていくのかなと思います。そういう意味でもどのように我々として情報を提供していくかもそうですし、個々のお立場で実践をしていただくかを組み合わせてやっていくことかなと思います。

一方的な情報提供、場所を用意して来ていただいた方に情報提供するだけではなく、地道な自然に目に触れるような形で、いかに意識として変えていけることになるかをしっかりやっていくことが基本だと思います。

松井委員： 私の中では、朝ごはんを食べない小中学生、高校生が一番の問題です。

毎年、年1回、アスリート栄養教室を開催しています。その中で、20人のうちに、2人、3人と朝ごはんを食べないで寝ている子どもがいます。「朝ごはんを欠食していますか」という質問の際に、朝ごはんを食べる時は一人であったか、何人家族かなど、深く聞いてみてはいかがかなと思います。両親が夜勤に行っている家族を知っていますが、その時に朝食を作って出かける方とそうでない方がいらっしゃいます。そういう状況も分かればいいかなと思います。

また、両親が朝食を食べない家庭に育った子どもは、どうしているんだろうと思うことがあります。例えば、私の町内にそういう小中学生がいたら、朝食会場を提供する家庭があって、朝食を作れるなら作ってもいいのかなと思います。

アスリート栄養教室が終わった後は、「塾よりも朝ごはん」という合言葉が生

まれていまして、子どもたちと関わる時は、朝ごはんを食べてきたかを聞くようにしています。本当に私にとっては朝ごはんが一番気になります。

また、「共食」について、私自身、民生児童委員をしています。一人暮らしの方のお話では、お腹がすいてから食べたいようで、一日二食のことが多いと伺います。

私の町内では、高齢者が月1回集まる機会があります。おかずを持ち寄り、ご飯を炊いて、一食食べる活動です。多世代で暮らしている方は子どもが好きなおかずを持ってきてくれて、一つの料理によって普段話をしない人が話をする状況が生まれます。高齢者にとっては、そういう場が必要だと思います。逆に若い世代も料理のレパートリーが増え、もっと簡単にできるのかなと思っています。

平澤委員： 食の生産について、上越は、雪は確かに深いですが、春からの日照時間は日本一ですし、コシヒカリに代表されるように日本一おいしいものが採れる地域でもあります。例えば、よもぎを比較しますと、千葉のものに比べると倍近い葉の厚さがあるくらい、上越はミネラルが豊富で、力を持った土地であることは、みんな知らなくて、実は貴重な地域であります。

その現場の生産体制が変わってきていまして、農地を大規模化し、コストを安くすることで、国際競争力をつける方向で、国の政策がシフトされています。

この効果が出て、各集落で農業に携わる方が少なくなり、うちの集落を見ても、後継者のいる生産者はうちだけです。上越全体がそうってきていて、個人の農家が減ってきております。

今年は、国際農業年で、世界的に家族農業について強調される年です。地域で家族農業が激減しております。素晴らしいものが作れる上越の農地が畑を始めとして荒れ、イノシシが増えてきている状況ですが、まだ食料は輸入できますし、食の問題は何もありませんが、不安を感じています。

輸入すれば日本へ届くまでの間、殺虫剤や殺菌剤を相当かけないと持たない訳でして、日本人の髪の毛を測定しますと、農薬成分のグリホサートが検出され、日本人の体も変わってきています。ミツバチが減ってきていることも大問題になっていますが、日本では除草剤が平気で使われています。自分のうちで作った野菜を食べることがいかに健康に即しているかを提案したいと思います。

上越でも食の担い手を多用に育成してほしいと思います。稲作だけではなく、野菜も果樹も農産加工も含めて多様な農業を育成して若い人を取り込んで、食べるものをきちんと生産してほしいと思います。

農業高校を一つとっても、すぐに農業がやれる教育とは程遠い内容だと聞いておりますし、今農業をやっている人を利用して、遊びに来るとか、研修制度を作るなどすることも食育活動の一つかなと思います。農協の組合員さんも減ってきている状況を食育とは違うかもしれませんが、警鐘を鳴らしたいと思います。

小林委員： 私は、食農の観点で業務に取り組んでおります。また、次世代に対しての食農をJA全体で取り組んでおります。

関心のある方はより知識を高めていただければと思いますが、より広い世代の人へ食や農業のことを知ってもらいたいと働きかけはしますが、知ってほしい人にはなかなか伝わらないところが思い悩むところです。

そんな中でも、小学校などから声をかけていただき、出向いていく機会がありますので、そういったところでJAとして伝えていけるかなと思います。

なかなか忙しい世の中で、担当部署が変わると分からないこともあって、連携も大事だと思いますし、こういった会議に出させていただくことで、この中でも連携が取れる、JAでやると偏りが生まれますが、いろいろな方々が関わることで、平均して上越地域に食育が伝わると思いますので、こういった機会を活かし、JAとしてできることを協力できればと思っております。

笹原委員： 子育て世代の立場から意見をさせていただきます。私の家には小学3年生と1年生の女の子がおります。小学校でいろいろな食育の活動や話を聞いてくると、楽しそうに話をされていて、家でもやりたいと言っています。この前も、みそまるづくりを高学年が企画してやってくれて、フリーズドライの具材と味噌を丸めて、ラップに包んで持って帰ってきて、夕飯に出してほしいと言ってきました。子どもたちにとっては、学校が社会であり、いろいろなことを吸収してくる場所だと思っております。

私の周りのお母さん方の話を聞いていますと、各家庭でかなり差があると感じています。食育フォーラムなどに毎年行かれる方もいれば、あることも知らなかった方もいます。かなり差があると思いますので、子育て世代のところでは、

基本的な知識だとか、食育に対する意識を底上げするような活動をしていただければ、子どもにも伝わるのかなと思います。

幼稚園の頃は、保護者が作ったものや出されたものを食べますが、小学校高学年くらいになると、自分でいろいろなものを選ぶようになるのかなと思います。

小学校や幼稚園くらいなら、お母さんへのアプローチが有効なのかなと思いますし、小学校高学年、中学校くらいになりますと、子どもたち自身に対してのアプローチが有効なのかなと思います。私自身も子どもを見ながら、自分の食事でも昔ちゃんと食べていたような食生活に戻さなくてはいけない意識にも変わっていきますので、子どものいる世代や子どもへのアプローチの仕方がもう少し細かくなるといいのかなと思いました。

高校生の食育の事業を、小学生や中学生にも一つの事業として行っていただけたら、そこも変わっていくのかなと思いました。

藤田委員： いたくら保育園の藤田です。資料のアンケートの数字ではありませんが、保育園の3、4、5歳児にアンケートをしたとしたら、食育について「楽しい」「嬉しい」という回答が100パーセントだと思います。それほど子どもにとって食べることは、自分たちにいいことだということは分かっていると思います。

公立の保育園では、保育の重点に食育を置き、年4回は保護者宛に食育だよりを出すと決めて、4、5年各園で取り組んできましたが、次年度はやめました。保育園の職員はとても上手にできていますので、次は、保育園の地域性、必要に応じて自分たちで食育を考えます。職員は考えて工夫すると思います。

保育園で野菜づくりはどの園でもしていますが、本当なら、じゃがいもは皮が付いたままふかして食べ、畑で採れたトマトをズボンでこすって食べたいです。皮を剥いたじゃがいもをふかしても本当のじゃがいもの味ではありません。トマトに火を入れても本当のトマトの味ではありません。本当の食育はその場所で採れたものを、そのままの姿のものを口にする。ですが、この世の中、感染症等の問題でそれは不可能です。それは残念だなと思います。

いたくら保育園はさつまいもを栽培していて、いつも焼きいも会を子どもと職員で行っていましたが、この食育の会議に出させていただいて、皆さんのお話を聞いて、今年度、地域の方に声をかけましたら、3人ほどお手伝いをいただき

ました。一緒に食べるところまではいきませんでした。これから継続していき  
たいと思います。地域の方や保護者の方とつながっていければと思います。

そして、自分にできる小さなことですが、発信が大切だと思います。私がした  
地域への発信を、また公立保育園の職員にも発信していけたらと思っています。

柳 沢 委 員： 高田北城高校の柳沢です。本日初めてこの会議に出席させていただいて、上越  
市の食育の取組が、非常に幅広い事業を包摂した中で行われていることを感じま  
した。保健行政、農業行政、教育行政全てに渡るいろいろな取組が食育に関わる  
ことを改めて認識をさせていただきました。

私は市内の高校の代表としてこの会に参加しておりますが、高校で何ができ  
るかを考えていましたが、学校の中では食育に係る部分として、保健体育、家庭  
科、社会科の中でも公民、将来的には公共という科目が入ってまいります、  
様々な場面で食育を観点とした授業はできるだろうなと思っています。

上越市の食育推進計画の中に「食育とは」という定義的なものが記載されてい  
て、食育の目指すところは、健全な食生活を実践する人間を育てることとなっ  
て、教育に帰結するような目標が掲げられています。そういう目で事業の説明  
を聞かせていただくと、いろいろな事業が最終的に人づくりに向かっている事  
業と、人づくりをした上で、例えば、農村振興、農業振興、地域の活性化、健康  
寿命の延伸など教育を経由して、またベクトルが外に向いている事業もたくさ  
んあるのではないかと思います。非常に事業もたくさんあり、まとめるのが大  
変な取組もあり、それを束ねるのがもしかしたら、学校教育なのかもしれないな  
というような強い使命感を感じた次第です。

もう一点は、高校の現状をお話したいと思います。高田北城高校としてではな  
く、上越での勤務が長いものですから、上越全体を包摂した意味で捉えていただ  
きたいのですが、学校の取組は大事ですが、保護者との連携は非常に大切だと感  
じています。学校の教育力は家庭の教育力には及びません。学校ももちろん頑張  
りますが、やはり家庭教育が非常に大きいと私は感じています。例えば、市内の  
ある高校では、昼にお弁当を持ってくる人が多い学年は落ち着いていると聞きま  
す。高校になると、とかく家庭との距離が開いてしましますが、高校も家庭と連  
携しながら、食育を進めていかななくてはいけないと感じた次第です。

また、後ほど野口先生から上越教育大学と高校との連携の取組についてお話いただけると思いますが、いろいろな学校で外部との連携を進める中で、食育を推進していく必要性を感じました。

高橋委員： 私は医療分野でやっている訳ですが、薬の進歩によって、しっかりやれば多くの人はものすごくいい治療ができて、昔とは状況が変わっていますが、どんなに頑張っても改善しない人が一部います。とても太っている人たちで、大柄でもない人が百数十キロであるとか、だいぶ太めであまり成果がよくない人が一部います。薬の力が及ばないくらい肥満になってしまった人がいます。

どうしてこのような状況になったかという、食生活の乱れがあります。忙しいすぎて、食欲はないが果物だけはどっさり食べる、ご飯やおかずはあまり食べず、お菓子はどっさり食べるという人がいます。基本的な食生活がしっかりとできず、ちゃんと食事を三食食べることが固まっていない人が、食べたいものを適宜つまんで、結果的にすごいカロリーになっていることがあります。

反対に高齢者を中心に、お腹がすかないから食べないとか、働き盛り世代でも朝はあまり食べないで、お昼はそこそこ食べて、家に帰ってからしっかり食べる人もいます。基本的な食習慣がなされていない人が糖尿病になっています。

それとプラスして運動不足の要素があって、食生活の乱れと運動不足の二つが相まって、状況が悪化しています。食生活の安定は基本だと思います。そうなる前に、若い頃から基本的な食生活があって、朝、昼、晩、栄養バランスのとれた食事を程よく食べて、元気に働き、元気に勉強するという習慣を作ることが必要であると強く思います。

食べる人がいるから食材の需要がある訳で、食べる必要度に応じて、食べ物が供給される、その時に適切な多彩な食材が供給されれば良いと思うわけです。

高校生の食育は非常にいい狙いだと思います。これから卒業して進学すれば一人暮らしになるし、就職しても独立する人もいるだろうし、そういう時こそ、ちゃんと元気に生きていくんだよということで食事の勉強をすることは身に入りやすい、受験で忙しいところもあるけれど、次の生活に向けて意欲に燃えている時期はいいタイミングであると思います。

子育て世代については、子どものことであれば親は頑張るという話がありまし

たが、確かにそうだと思います。子どもの食事問題、肥満の解決は結局親世代に向けないと話が進みません。子どもを介して伝えることもいいと思います。

食育推進計画の事業は非常に多彩で、全ての面が重要ですが、何を狙うかの整理は必要かと思います。個人が多彩な栄養素をバランスよく食べることを身に付ける、伝統的な食事は基本的にはいいのですが、伝統食がいいかという点必ずしもよくない。日本食は基本的にはいい栄養バランスですが、食塩が多すぎる、カルシウムが足りないとか、伝統的だからと言って、万全とはいかないので、出来上がりの食事パターンを示すこともいいと思います。食材は食材であって、調理して料理として出来上がったものが食事になるわけです。正しいものを選ぶ、作る、買ってくるのが家庭でできていれば、それを見習えばいいのですが、そうでない場合も多いので、いろいろな団体が的確にいいパターンを示すのもいいと思います。

思いましたのは、現実の家庭の食事内容がどのくらいいい栄養バランスのものがあるのか、そうでない食事はあるのかなどの実態調査は聞いたことがないので、指導するにしても家庭の実態調査は抜けていると感じました。いい食事パターンを選べる、作れる、買うことを身に付ける。情報の面からも食育が推進されればいいと思います。

上野委員： 黒田小学校の上野です。先日、中学校区の養護教諭の会議に出席し、子どもたちの課題について話し合いました。その中で朝食は多くの子どもが食べていますが、内容が貧しいという話が出ています。炭水化物だけであったり、野菜やたんぱく質がなかったりなどの貧しさが目に付くようです。学校ですので、学校教育の中で食育を進めていく訳で、朝食に関しては家庭にお願いする内容であり、学校としてどこまで踏み込めるかの限界がある訳です。

小学校ですので、低学年については、保護者の保護のもとに育成していくものでありますし、発達段階が高くなっていく高学年になると、自分で選択し作るという、自立への力をつけていく訳です。低学年はよい体験を積み、高学年になってよい体験の上に自分ができる体験を増やし、家庭に持ち帰って自分で家庭実践して活用していく力を教育の中で育てていくのがいいだろうと思います。

これについては、教科に固執するものではなく、教科の枠を超えて横断的に育

むもので、どの教科とどの教科を結び付けて、どの活動を位置づけると一番いいかの構成力が必要となりますので、カリキュラムマネジメントしていくようにと教育委員会からも指導を受けています。1年から6年までの食育に関する部分を組み合わせながら、最終的に6年間で力を付けていくように進めています。

来年から新指導要領が始まり、学校の中でその対応で食育どころではない部分もありますが、食育は絶対大切な部分で、今はアレルギー問題で、食物アレルギーへの対応については、学校の喫緊の課題であります。子どもたちには、自分はどんなアレルギーを持っている、どんな食材がダメなのか、自分で品質表示を見て選ぶ力も将来的には必要になってきます。本当に必要な力を学校で指導し、学びながら、実際に社会に出て、または家庭で活かす、そういう力を付けていきたいということで取り組んでいます。

学校教育課や教育総務課でも、給食の献立を通しての活動も出ておりましたが、それを受けて給食の時間も食べているだけでなく、「まんべんなく食べるんだよ」などと先生が指導しています。それを通して子どもたちは方向性を持って、残さず食べようという気持ちが育っていると思います。

そこで困るのが、残量があるという部分です。小さい時から野菜はだめという子どもが多く、小さい頃から味に慣れていないと、なかなか給食に野菜が出た時も食べられない状況がありますので、保護者の皆さんには、小さい時から、好き嫌いなく食べる努力をしていただくと、学校教育の中で食品ロスのない、残量がない全部食べる教育も成果が挙がると思っています。

家庭と学校は密接な連携が必要ですが、家庭はいろいろな事情があり、可能なところと不可能なところがある、ただそこにできるだけ寄り添い合いながら進めていく必要があるかなと実際の教育の場面で感じております。

いろいろな活動があって進めていく時に、学校の子どもたちをなんとかすればいいだろうという考えが往々にしてありまして、例えば「〇〇コンクール」を学校に出して取り組ませることで、それに対する意識を持たせることがよくあります。ただ、学校事情としては、カリキュラムが全て決まっています、そういうものを取り入れて活かすことが難しいので、先ほど、乗り入れ授業というご意見もありましたが、カリキュラムとの整合性を取りながらでないと、取って付けた

教育になりやすいので、よく趣旨を吟味しながら、教育の中に取り込んでいく形を考えていかないと難しいと思います。

いろいろな食育に関する実践や活動があった時に、一番感じるのは、テレビなどの映像で見ると、意識が高まります。上越の食育に関わる活動についても、メディアを利用して情宣活動をしていくと、少し変わるのではないかと思います。「これは上越市の食育で取り組んでいることです」と共通に入れていくなどの工夫ができるかなと思います。

学校では、設問の仕方が肯定的な問いをして、否定的な表現はしないようにしています。第3次上越市食育推進計画指標項目の1「朝食を欠食する市民の割合」で、「朝食を食べていますか」など、肯定的な投げかけをすることで、意識が変わるのではないかと思います。矢印の見方も変わってくるので、上向きがいいという形にするには、発問の仕方を変えるのもいいかと思います。

野口会長： ただ今のアンケートの書き方ですが、資料No.5の3ページ、「あなたは普段朝食を食べますか」という質問にはなっていますので、あくまで集計表現ということでよろしいですね。集計表現が表に出ていく場合が多いので、その時は今のご意見を参考に、表現を改めていくのも大事なかなと思います。

岩崎委員： 私は会社員時代、単身赴任を10年やっています、自炊生活に自信はあったのですが、肉が中心で、歳をとってから弊害が出てきました。栄養学が大事で、高校生の食育推進の報告の中でも、栄養学が勉強になったとコメントが載っていますが、栄養調理学とでもいいですか、例えば、水から茹でる野菜、お湯から茹でる野菜など、調理方法によって、栄養の素材が活かされないことなど、知らない人が多いので、可能であれば、上越市の広報でワンポイントクッキングのように、定期的に出してほしいと思います。

山本委員： 私には24歳の娘がいます、離れて暮らしていますが、食生活がいい加減でしたが、気を付けて自分で作って食べるようになり、今まで風邪ばかり引いていましたが、この冬は一度も風邪を引かず、何てことのないものでも自分で作って食べたほうがいと分かったようで、とても嬉しく思っています。

21歳の長男が中学2年生の時に、横道に逸れた時期がありましたが、学校の先生から、お母さんはとにかく美味しいご飯を作って待っていてあげてくださいと

言ってもらい、何をしたらいいか分からない私にとって、先生の言葉がすくいになりました。そればかりではないですが、長男は、今は明るく成長してくれまして、先生の一言がすごくありがたかったことを思い出しました。

25年、新潟を離れておりまして、久しぶりに郷土料理の「のっぺ」とぜんまいが入った「お雑煮」を作ってみました。それを食べた時に、家族とこたつを囲んで食べた時の懐かしさがこみ上げてきて、母も歳をとって作れなくなり、自分が作る番になりましたが、郷土料理は大事で郷土料理のすごさを感じました。

最後に、2年の任期がもうすぐ終わりになりますが、この会議に出席するのがとても楽しみで、ここで知り得た情報を周りの人に伝え、共感し合うことがすごく楽しくて、任期満了後は、傍聴席で聞かせていただき、知り得た情報を自分の周りの人に発信していきたいと思います。

渋谷委員： セブン-イレブン・ジャパンの渋谷と申します。本日この場にいる中で、食品販売事業者が弊社のみですので、代表してお話させていただきます。大きく3つポイントを感じました。

一つは地産地消です。新潟県、上越市の食材は非常においしいと思います。入社して、新潟に来て15年が経ちますが、もともと出身は県外です。年に1度地元に戻りますが、お寿司屋さんや洋食屋さんに行きますと、おいしかったはずですが、実際にこんな感じだったかなと思います。今は長岡ですが、帰ってきますと、個人のお店の料理が非常においしく感じます。

新潟の人は恥ずかしがり屋で、発信が得意ではないので、小学校、中学校などで地元食材の誇りへの教育を付加していくといいのかなと思います。

二つ目は情報発信です。弊社では、専用アプリを2年前に創設いたしました。このアプリの中で、地元の食材を使った商品紹介を差し込みますと、非常に反応がいいです。去年で申し上げますと、地元上越の杉田味噌を使った味噌ラーメン、長岡系になりますが、生姜醤油の冷たいラーメン、柏崎では鯛めしおむすびなどを毎年出しますが、どれも年間の総販売量で1位になっています。そういった意味で、東京基準ではなく、地元の食材を使って、地元の方に売る、以前は県外へのアピールも大事でしたが、まだまだ知らないだけで、ニーズはあると思います。

最後に、食品ロス関係です。弊社も恵方巻、その前はクリスマスケーキ等でマ

スメディアに取り上げられ、苦しい時期もありました。直近では恵方巻は、全国的に申し上げますと、仕入れが 100 本とすると、販売数が 96 本となり、4 本が廃棄になりましたが、消化率は昨年と比べると十数パーセントほど改善いたしました。これでいいわけではなく 100 パーセントにしなければならないですが、取組は強化しております。

今春弊社では、エシカルポイントを導入する予定です。オリジナル電子マネーを使って、おにぎりやお弁当、サンドイッチの賞味期限から 5 時間前の商品を買っていただくと、5 パーセント分のポイントを付与する形です。今後も食品ロスに関しても厳しい目にさらされないよう、取組を強化していく次第です。

竹内委員： 朝食を欠食するということが頭の中に残ってしまっていて、歯科衛生士の情報誌の中に「貧困と生活習慣」の記事がありました。

虫歯とは単なる歯の病気ではなく、社会的な意味を持つ疾患であると書いてありました。朝食の摂食状況は、平成 25 年度全国学力学習状況調査の文部科学省の分析では、貧困所帯や一人親所帯では朝食を毎日食べている割合が低い、朝食欠食者は夕食時刻が不規則で、夜食をたくさん摂ると歯磨きを毎日しない状況になるとのことです。

また、排便も毎日しないなど、生活習慣にも望ましくない習慣が多く、起床時刻、就寝時刻ともに遅く、統計的に有意な差が認められていると書かれていました。朝食の欠食は、虫歯を作ることにつながり、生活リズムも乱れることとなりますので、朝食の欠食は大切なキーポイントになると思われました。

細谷委員： 今年度、食育実践セミナーと高校生向け食育推進事業に参加しましたので、感じたことを話したいと思います。

私は、群馬県出身で、地元でも食育フェスタのようなものが開催されていますが、そこでは、成果発表や販売などはしているものの、上越市のように、体験や試食、実際に食に関わる機会がありません。

上越市の食育実践セミナーでは、学校給食の試食で、車麩のカツがあって、ヘルシーで麩を使ったカツだったのに、本当のカツのようで、すごいと感じました。そこでのレシピ配布も直接食べて実感できているからこそ、レシピにも興味を沸かし、直接食に関わる機会は大いだと思います。

高校生食育でも、調理実習をしましたが、レシピのない料理教室で、高校生はあまり料理をしたことがない人が多かったのですが、しっかり料理ができていて驚くことばかりでした。その経験をしたことで、高校生も自信になっていて、これからは少しでも家で料理をしたいと言っていたので、生活の中の食育がすごく有効的になっていると思いました。

生徒には学校に入った食育、大学生には食堂やインスタグラムなどのSNSはよく使っているなので、その影響力はあると思うので、身近なものにつなげていけたらいいと思いました。子どもからの食育も家族につながり、大人へもつながっているなので、子どもからの影響も大きいと思います。食に直接関わることでできるイベントは興味に直接つながると感じたので、続けていってほしいです。

野口会長： 意見交換のテーマ「上越市のこれからの食育推進」についてお話いたします。

一つ目は、食育推進会議において、1回あたりの会議の時間が2時間というの、この人数が参加するにあたって、皆さんが限られた意見しか話していないと思います。時間が短い。委員会とワーキンググループが必要なのか、委員会を数回に分けるべきなのか、意見交換をする予定であったのに、意見交換ができない会議であったのが残念です。

また、年2回の開催、また委員の任期と会議開催時期についてです。会議開催時期はアクションプランの進捗及び確認に我々委員が関わっているので、この時期であることは確かです。しかし、委員の任期が7月スタート7月終了であり、そのズレが会議開催とうまくマッチしていないのは皆さんもお感じのとおりです。本日をもって任期終了ではなく、我々は7月途中まで任期があります。上越市の食育推進において、会議委員である我々は、あくまでも数か月責任を持って情報の発信や意見の交換に努めるべきであるのです。今後の課題として、今までと変わっても構いませんので、スムーズな委員任期、会議開催を望みます。

中身についてですが、多くの皆さんがお話されていた情報の発信の大切さと情報共有の大切さがありました。アクションプランの中身に関しましても、市役所が行った事業に対する市民の参加者数や、参加率が指標になっていますが、これが残念です。

改善点は何かと言いますと、情報の発信は、市民発信型であるべきと思います

し、それぞれの組織の中で、取り組んでいることで、個人情報に関わることは出す必要はありませんが、市民の食育の取組が、アクションプランの評価指標に入っていない理由はなぜかという、このアクションプランの評価には、市民向けアンケート調査という市民の意識調査を中心とした評価をしている、これは大事なことです。食育関連事業者及び食育の主催者、または食育関連団体の皆様向けの一年間の取組についての事業者向けアンケートや報告など、例えば、JAや上越教育大学にアンケートを取っていません。多くの食育に関連する事業を行っている方々に向けたアンケートを行うことで、会議の場にも挙がってくる、またはアクションプランの評価の項目にも挙がってくるようになれば、上越ではいろいろな取組が行われていることが目に見え、情報が集まってくることで、発信もしやすくなると思います。

市役所の努力のみで食育が推進するわけではありません。委員の皆さんだけでなく、多くの取組を行っている方々の実例をいかにして食育として発信できるかが大事です。そういう意味では実態調査の必要性を高橋委員からもいただきましたが、意識アンケートを取るだけでなく、本当に実際どうなのか、少人数でも構わないので、ターゲットを絞って取れないか、プランニングしながら、実態を取り上げていけたらいいと思います。そういう意味ではセブン-イレブンの食品ロスの取組の実例を数字で表すことは、参考になりました。

保育の現場において、私は全国保育士会の特別委員会の委員としまして、全国の保育士の皆さんと食育の言語化に取り組んでいます。食育の言語化とは、食育の大切さをどう言葉で表すかという取組です。数字で表現する数値化と言語化です。食育を言葉として伝えること、食育を数字として伝えること、これは食育の表現として重要だと思っています。

上越市の取組の中におきましても、一つひとつの小数点以下の数字を追いかけるよりも、その方向に向かっているという質的なものに関しては全て「○」ではないかということは、私も同感です。しかし、数字を追いかけていく時のどれを持って「○」とするかは、少し寛容な態度で向かってもいいのかなと思います。

トマトの加熱やじゃがいもの皮を剥く、剥かないについては、全国各地で私も質問を受けることがあります。保育の現場において、栽培活動の後の収穫体験、

料理の体験の重要性は私が言うまでもありません。では、結果はどうかというと、園長、校長の采配ですとなります。

しかし、校長先生でも教育委員会の方針もあるかと思えます。保育園では、公立の園ではその地域の取り決めの中で、その自治体によってだいぶ雰囲気が違います。関西は確実に加熱です。サラダは全部加熱されています。0-157 以来、1996 年以降、学校給食においても保育園給食においてもそういう自治体が多い中、東日本、東北地方、九州、四国では、収穫体験の後に食べる場所は普通にあります。全国各地、賛否両論ありつつ、やれるところとやれないところ、全国の研修会に出席しますと、地域によって違うことが分かります。

もう一つ、保育園における焼きいもの会ですが、食育の一環としてだけでなく、食育が何につながるかということ、地域の方との交流、これが食育において、いも掘りだけでなく、食べるという体験で通じることと思えます。

最近私が言っているのは、食育と防災についてです。保育園の防災を考えた時に、日頃からどこに鍋があり、どこに炭があり、木材があり、どのように火を炊くことができるかを、月に 1 回でも食育の一環として地域交流の中で行っている園では、若手保育士が、薪で火を炊くことができ、鍋を作ることができ、いざという時は釜戸でご飯を炊くことができます。いざという時に保育の現場で食事の提供が可能であるということです。

多くの自治体では学校の現場は避難所になっています。しかし、阪神淡路大震災で震度 7 を経験した私としましても、避難所に行きまして、寒い避難所でいろいろな世代の人が一緒にいる中で、親子で避難所に行くことは、子どもの泣き声がうるさいなどとおっしゃる年配の方も多数おられる中で、保育園の建物が倒壊せずに、しかも調理場がある保育園の役割として、子育て世代の方々向けの安全なる避難の場所としての保育園というものを見つめ直す時期ではないかと思っています。日本全国で保育の現場の役割として、日頃の食育は防災力の向上につながるという考え方はとても大事だと思っています。

市民発信型の大切さは今ほど申し上げたとおりですが、そのための場所や機会を作るのは行政の役割かもしれません。年に数回、皆さんにメールでアンケートを取ります。「この 2、3 か月の間にどんな食育ができましたか」、「皆さんの

食育の取組を市役所に送ってください」という風を集めることで、このアクションプランも次回以降は充実したものになっていくのではないかと思います。

市役所の取組の数字のみならず、市民の活動をもっと取り上げるアクションプランになっていくといいなと思います。それを強く感じたのは、食育ネットワークの消滅です。皆さんが主人公であり、自分たちが食育の主体者であることを考えながら動ける人たちです。取り組んだことを全てメディアにフォローしてもらうのは難しいので、市役所には伝える、上越の食育のページにあげていただくことでも大きな発信の基になるのではないかと思います。

食育セミナーなどに来ている人は意識の高い人である、という言葉もありました。その通りです。そこに来られる方には言わなくても十分な方が来る、本当はここにいない人たちに伝えたい、こんなことばかりです。

実はホームページも一緒です。ホームページは、そこに行かないと見られませんが、ホームページに掲載して終わりではなく、情報がそこにあることを、どれだけ市民に伝えているかが大事です。フェイスブックやインスタグラム、ツイッターは、友達の登録をしていると、そこに情報が上がれば、通知がくる、だから見に行ってみる。新しい情報が入ったとの通知が来て、初めてそこを見ることができるかと思います。ホームページに新しい情報が更新されたという通知がなければ、誰も見に行くことがない、だからこそ、ホームページだけで終わらせないことが大事かと思います。

私が 2 年間委員及び会長という席に座らせていただいた中で、そして全国各地の食育の委員を務めてきた中で、上越市の皆さんの素晴らしい取組は、私も誇りに思っております。これからの食育推進というテーマでの意見交換でありましたので、可能な限り、私は、今までのことよりも、これからの食育推進の方向性やシステムとして、このように動いていくことで、上越市は食育推進ができているところだと市民に伝わるための意見として述べさせていただきました。

#### (4) その他（公開）

野口会長： 「平成 31（令和元）年度上越市食育推進連携業務委託事業」を上越教育大学が委託を受け、上越市内の高校生を対象に行いました。

テーマは食事力を高める食育実践で、今年度は、高田高校と高田農業高校2校を対象に実施いたしました。

県立高田高校の1年生への授業、クッキングクラブを対象とした食事力アップのための料理教室、レシピのない料理教室を開催いたしました。男子バスケットボール部では、男の子たちが料理をしました。高田高校で1年生向けに行った理由はこれからの3年間があるからこそ、3年かけて、保護者からの学びを得てほしいというメッセージを込めています。

高田農業高校のパターンは、3年生の卒業間近の1年間を対象としました。これから直後、すぐに就職、専門学校と上越を離れる子が多いことが分かりました。一人暮らしについて大学生から直接話を聞く機会を設ける形で、最終的には自分たちで料理をるところまでもっていきました。

もう一つ、上越教育大学とあるるんの杜の連携食育講座です。はじめの30分お話をし、残り1時間はみんなでご飯を食べるという楽しい食育の機会です。多くの方々が一緒になって食育を学ぶチャンスとして開催しているものです。情報共有の場としてご参加いただければと思います。

事務局：健康づくり推進課「健康づくりポイント事業」について説明（説明は省略）

問合せ先

農林水産部農村振興課

TEL：025-526-5111（内線1812）

E-mail：nouson-shinkou@city.joetsu.lg.jp

その他 別添の会議資料も併せてご覧ください。